

ひょうご 水百景

No.5 芦屋川（芦屋市）

～橋の名からいにしへの芦屋を想う～



写真-1 阪神電鉄・芦屋駅上りホームから撮影（平成30年4月）

■ 芦屋のシンボリック景観

写真-1 は、阪神電鉄・芦屋駅（橋上駅：写真-2）の上りホームから芦屋川を撮ったもので、目の前に架かる橋は「公光橋（きんみつばし）」、遠くに見える橋が国道2号の「業平橋（なりひらばし）」です。

この景観は、高級住宅地の代名詞となった芦屋市のシンボルのひとつになっていて、河口から業平橋まで松並木が続き、左岸には特徴的な淡緑色の尖塔をもつカトリック芦屋教会、右岸には瀟洒な住宅が並び、休日には河川敷を散歩する多くの市民の姿が見られます。また、業平橋から上流には桜並木が続き、桜の咲く頃には大勢の花見客で賑わいます。

芦屋川の左岸側を走る市道は、業平橋を境にして上流側が「業平さくら通り」、下流側が「芦屋川松風通り」の愛称で呼ばれています。

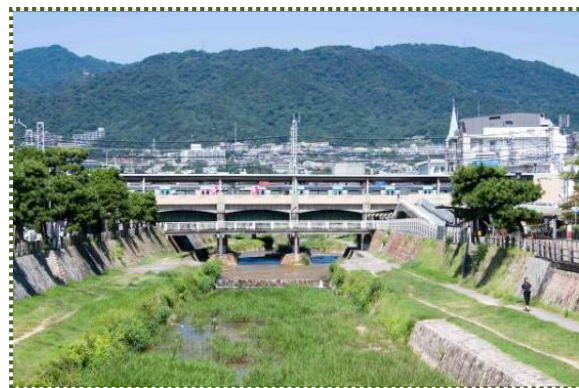


写真-2 阪神電鉄・芦屋駅は橋上駅（令和3年9月）

■ いにしへの芦屋由来の名を持つ橋

芦屋川に架かる橋には、いにしへの芦屋由来の名を持つ橋があります。下流から、鶴塚（ぬえづか）橋、公光橋、業平橋、月若（つきわか）橋です。このうちの3橋は、昭和19（1944）年の町名改正により生まれた「公光町」、「業平町」、「月若町」の町名の由来となっています。

今回は、これらの橋の名から、いにしへの芦屋がどのような地だったのか調べてみました。千年も昔の芦屋の姿を想像してみてください。

■ 鶴塚橋（市道312号）

鶴塚橋は、大正4（1915）年から5（1916）年にかけて行われた芦屋川第1次改修工事に伴い、大正6（1917）年に架けられたもので、その際に「鶴塚橋」と命名されたようです。

現在の橋は、昭和63（1988）年に架けられています。



写真-3 大正6（1917）年の鶴塚橋（木橋）竣工式
（芦屋市HP「芦屋思い出写真館」から引用）



写真-4 芦屋遊園 鶴塚橋遠景（大正9年）
（芦屋市HP「芦屋思い出写真館」から引用）



写真-5 鶴塚橋（令和3年9月）



写真-6 鶴塚橋の親柱（平成23年9月）

「鶴の鳴く夜は恐ろしい…」、これは横溝正史原作の『悪霊島』が映画化され、その時キャッチコピーとして流されたもので記憶されている方も多いと思います。

「鶴」とは、『平家物語』などに登場する伝説上の動物で、猿の顔、狸の胴体、虎の足を持ち、尾は蛇、「ヒョーヒョー」とトラツグミという鳥の声に似た気味の悪い声で鳴く、とされています。橋の名は、『平家物語』第四巻「ぬえ」に出てくる「源頼政^{*1}による鶴退治」にその由来があります。

平安時代末期の仁平年間（1151～1154年）、近衛天皇の住む御所が、毎晩丑の刻（午前2時）頃になると黒雲に覆われ、帝が気絶されるということが続き、祈祷をしても効果がなかった。側近たちは、かつて源義家が弓の弦を鳴らして怪事を止めた前例に倣って、弓の達人である源頼政に怪物退治を命じた。

頼政はある夜、家来の猪早太^{*2}（いのはやた）を連れ、山鳥の尾で作った尖り矢2本と滋藤（いげどう）の弓を手に御所に出向いた。丑の刻になると御所を黒雲が覆い始めたので、頼政が尖り矢を射ると見事に命中。すかさず猪早太が落ちてくる鶴を取り押さえてとどめを刺した。これにより帝の体調もたちまちにして回復し、頼政は帝から褒美に獅子王という刀を賜った。



写真-7 長明寺境内にある『頼政公の鶴退治』像



写真-8 芦屋公園にある「鶴塚」

鵜の屍骸は、崇りを恐れた都の人々が、丸木舟に乗せて鴨川に流した。舟は淀川を下り、海を漂って芦屋川と住吉川の間の浜に打ち上げられた。芦屋の人々はこの屍骸をねんごろに葬り、後に鵜塚をつくって弔ったという。

源頼政の鵜退治は、その後、二条天皇の在位の頃（在位 1158～65 年）にもう一度あったという。

「鵜塚」の近くに架かる橋の名は、この塚に由来するものです。

※1 源頼政：摂津源氏の祖・源頼光の五代目・源仲政の長男として生まれる。弓術に長じた頼政は歌人としても多くの和歌を詠み、「千載和歌集」や「新古今和歌集」に名を残している。保元の乱、平治の乱で勝者の側に属し、戦後は平氏政権下で源氏の長老として中央政界に留まった。清盛から信頼され、晩年には武士としては破格の従三位に昇る。平氏の専横に不満が高まる中、以仁王（もろひとおう）と結んで平氏打倒の挙兵を計画したが、計画が露見して準備不足のまま挙兵、平氏の追討を受けて宇治平等院の戦いで敗れ自害した。享年 77。

※2 猪早太：生没年不詳。平安時代末期の武将。源頼政に郎党として仕えた。『播磨鑑』では、頼政の知行地であった播磨国野村（現・西脇市野村町）の生まれとされる。JR 加古川線・西脇市駅の南に「猪早太供養碑」（写真-9）がある。猪早太の後裔によって建てられ、現在もその一族により供養が続けられており、碑の背面には次のように記されている。

「本村高松ハ頼政公ノ領地ナリ 而シテ我祖猪早太ハ其従者ナリキ 公平院ニ於テ自刃ノ時 其ノ遺骸ノ一部ヲ奉シニ還リ 之ヲ高松山長明寺ノ浄域ニ埋ムト傳フ 今現存セル墳則チ是ナリ 茲ニ祖先追慕ノ為メ勤シテ以テ之ニ表銘ス 昭和四年五月 後裔 長井伊作建之」

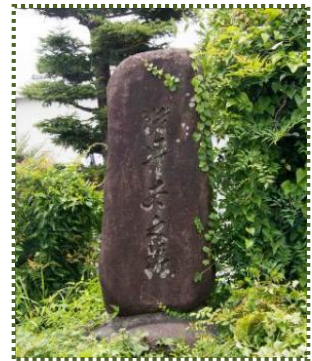


写真-9 猪早太供養碑

■ 公光橋

阪神電鉄・芦屋駅の北側に架かる橋が公光橋（写真-1）です。この橋は、鵜塚橋同様、芦屋川第 1 次改修工事に伴い、大正 4（1915）年に木橋が架けられています。その際に「公光橋」と命名されたようです。

昭和 42（1967）年 7 月豪雨で橋は倒壊（写真-10）、翌昭和 43（1968）年に新橋が架けられています。



写真-10 公光橋倒壊（昭和 42 年 7 月）
（芦屋市 HP「芦屋思い出写真館」より引用）

この橋の名の由来は、謡曲『雲林院』にあるそうです。あらすじは以下のとおりです。

摂津の国の芦屋に住む公光という若者は、子どもの頃から伊勢物語を愛読していました。ある夜、夢を見て京都の紫野にある雲林院※1を訪ねます。

ちょうど桜の季節で、満開の桜を一枝手折ると、老人が現れて咎めます。古歌をひいて問答するうちに、公光の夢に在原業平と二条后※2（にじょうのきさき）が『伊勢物語』を手にして現れたことを告げます。

実は老人は業平の霊で、公光に「花の陰に寝て待て」と告げて消えます。やがて業平の霊が現れ、業平と二条后との恋を語り、夜遊の舞楽を奏で、『伊勢物語』を語りつくすうちに夜があけて夢が覚めます。

公光は架空の人物ではなくて、院政期に実在した藤原公光※3（1130～1178 年）とする説がありますが、いずれにせよ月光のさす木陰に美しい夢を見た若者・公光の名が、時を経て阪神電鉄・芦屋駅の北を東西に走る市道・鳴尾御影線の橋の名や町名に残されています。

※1 雲林院：京都市北区紫野にある臨済宗の寺院。もとは、淳和天皇の離宮・紫野院として造成された。その後仁明天皇の離宮となり、やがて皇子常康親王に譲られた。貞観 11（869）年親王が亡くなった後、僧正遍昭に託し、ここを官寺「雲林院」とした。元慶 8（884）年、遍昭はこれを花山元慶寺の別院とする。その後、鎌倉時代までは天台宗の官寺として栄えた。雲林院は桜と紅葉の名所として『古今和歌集』以下の歌集の歌枕であり、在原業平が『伊勢物語』の筋を夢で語る謡曲『雲林院』の題材にもなった。鎌倉時代に入って衰退したものの、正中元（1324）年に復興され、大徳寺の塔頭となった。以後は禅寺となったが、応仁の乱（1467～1477 年）の兵火により廃絶した。現在の雲林院は、宝永 4（1707）年にかつての寺名を踏襲し、再建されたものである。雲林院境内にあった大徳寺塔頭の真珠庵に「紫式部産湯の井戸」がある。紫式部はこの周辺で生まれ育ったとされ、その名も、雲林院の建つ紫野に由来するといわれている。

※2 二条后：藤原高子（ふじわらのこうし）の通称。承和 9（842）年～延喜 10（910）年。清和天皇の女御、のち皇太后。『伊勢物語』や『大和物語』などを史実とする見解からは、入内（じゅだい：皇后・中宮・女御となる女性が正式に宮中に入ること）する以前に在原業平と恋愛関係があったと推測されている。

※3 藤原公光：平安時代後期の公卿・歌人。大治 5（1130）年に権大納言・藤原季成の嫡子として生まれる。

■ 国道2号・業平橋

初代の業平橋は、芦屋川の第1次改修工事に伴い、大正6(1917)年3月に木橋として架けられました。



写真-11 大正6年に架けられた初代業平橋
(『芦屋川の歴史』から引用)

二代目は、大正14(1925)年から始まった阪神国道(国道2号)の建設に伴って同年12月30日に花崗岩と鉄筋コンクリートの橋に改築されています。

なお、阪神国道は昭和2(1927)年4月1日に開通しました。

昭和10(1935)年には、業平橋より下流に芦屋川沿いにクロマツが植えられ、昭和24(1949)年には業平橋より上流に桜が植えられています。

業平橋は、昭和13(1938)年に起きた阪神大水害で高欄の一部が損壊し、橋下は土石で埋まってしまいましたが、橋は構造的には無事だったようです。

業平橋は、大正期からの長きにわたって阪神間の東西交通を支え、意匠的にも優れているとともに、時代に応じた改修を加えつつ昔の面影を保ちながら現在に至る貴重な土木遺産であるとして、平成30(2018)年に「土木学会選奨土木遺産」に認定されています。

■ 在原業平に因んだ橋名・業平橋

「昔、男ありけり……」という書き出しで始まる日本の文学史における歌物語の代表作『伊勢物語』。平安時代に書かれたこの物語は、奔放かつ華麗な人生を送ったと伝えられる天才歌人・在原業平(825~880年)をモデルに、恋愛や交友、失意の流浪や遊興など、さまざまな内容が和歌を中心に語られています。

この物語では、業平の生活とともに芦屋の里の美しい情景が描かれています。業平の別荘は、『摂津名所図会』によると、芦屋川の東、西国街道(現・国道2号)の北あたりにあったそうです。

業平は、第51代平城(へいげい)天皇^{※3}の皇子・阿保(あへ)親王の第五子で六歌仙のひとり。阿保親王が芦屋の地で亡くなったと伝えられていて、翠ヶ丘町には阿保親王塚があります。



図-1 芦屋川周辺地図



写真-12 大正14年に竣工した業平橋

業平橋の北約 200m 地点に架かる大正橋の左岸にある「松の内緑地」には、『伊勢物語』第 82 段で業平が詠んだとされる歌が刻まれた句碑があります。

ただ、第 82 段の舞台は交野(かたの)で、平安時代、大阪府交野市北部から枚方市にかけての丘陵地は「交野が原」と呼ばれ、皇室の遊獵地で桜の名所だったそうです。同じ桜の名所ということでこの句を選んだのでしょうか。

なお、芦屋と関係のある句は第 87 段です。

※3 平城天皇：第 51 代天皇（在位：806 年 4 月～809 年 5 月）。桓武天皇の第 1 皇子。病気のため在位僅か 3 年で皇太弟の神野親王（嵯峨天皇）に譲位して上皇となる。

	世の中に 絶えて桜の なかりせば 春の心は のどけからまし 在原業平朝臣	『伊勢物語・第 82 段』 この世の中に 全く桜がないとしたならば 春の私の心は 何とのどこであろうか
写真-13 松の内緑地の業平句碑		
あしの屋の なだの塩焼き いとまなみ 黄楊の小櫛も ささず来にけり	『伊勢物語・第 87 段』 芦でつくった 粗末な小屋に住み 海辺で塩を焼く海女は 仕事が忙しく暇がないので 黄楊の小櫛を髪にさして 飾ることもなく 今まで来てしまいました	『伊勢物語・第 87 段』 あれに見えるのは 晴れた夜空の星か それとも川辺に舞う 蛍なのか いや私の住む芦屋の家の方で 海女がたく 漁火なのだろうか
	はるゝ夜の 星か河辺の螢かも わが住むかたの あまのたぐ火か	

■ 月若橋

月若橋は、阪急神戸線が開通する大正 9（1920）年以前からあり、「ベコベコ橋」、「どんどん橋」とも呼ばれていました（写真-14）。この木橋時代がいつまで続いたかは不明ですが、『精道村の歩み』に掲載されている阪神大水害時に撮影された写真-15を見ると橋は永久橋のように見えます。濁流が橋を越えています、流失したのか持ちこたえたのかは不明です。

現在の橋（写真-16）は、昭和 43（1968）年に架け替えられたものです。恐らく、昭和 42（1967）年の 7 月豪雨で被災して、公光橋同様、これを機に架け替えられたものと思われます。



写真-14 月若橋（ベコベコ橋）
（芦屋市HP「芦屋思い出写真館」から引用）



写真-15 阪神大水害で月若橋を越える濁流
（『精道村のあゆみ』から引用）



写真-16 月若橋
（阪急芦屋川駅のホームから撮影）

ところで、月若橋の橋名の由来は、謡曲『藤栄』にあるそうです。

鎌倉時代、時の執権北条時頼^{※5}が、民情を視察するため修行僧となって諸国行脚の旅の道すがら、芦屋の里に着き、月若の貧しい住居に一夜の宿を借ります。家の主はまだ少年ですが、人品卑しからぬところに心ひかれた時頼が仔細

を尋ねると、月若は、芦屋藤左衛門家俊という大地主の息子で、父の死後、後見人である伯父の藤栄に所領のすべてを横領されたことを打ち明けました。

翌日、藤栄が芦屋沖に舟を浮かべ、笛・太鼓を賑やかに打たせて自らも舞っているところに、時頼が舟を仕立てて近づき、舞い終わった藤栄に「今ひとつ所望」と声をかけます。

「無礼者！」と怒った藤栄は、時頼に打ちかかりますが、身をかわして時頼は、「汝、前代未聞の悪行者、許し難し。われは最明寺時頼なるぞ。」と大声で名乗りをあげました。

威に押された藤栄はすくんで、「お慈悲を」とすがるのみ（まるで「水戸黄門」の世界です）。

ここに月若の所領は元に還り、藤栄も心を改めて月若に仕え、やがて両家共に栄えてめでたし、めでたし。

橋の名は、この月若に因んでつけられたものです。

なお、月若町に業平と公光を祀った祠があります（写真-17）。月若町内会の提灯が掲げられ、入口には、向かって右に「業平大神」、左に「公光大神」と刻まれた石柱が建っています。



写真-17 業平と公光を祀る祠
(平成23年9月、月若町にて撮影)

※5 北条時頼：鎌倉幕府第5代執権（在職：1246-1256年）。4代執権北条経時の弟。出家後は最明寺殿、最明寺入道とも呼ばれた。寛元4（1246）年兄経時の病氣隠退のあとを受け執権に就任。建長4（1252）年將軍藤原頼嗣を廃して宗尊親王を迎えるなど北条氏の権力確立に努めるとともに、建長元（1249）年引付を設けて公正な政治を行うなど、幕政を刷新し、祖父泰時とともに武家政治の理想的指導者と考えられた。康元元（1256）年出家するが、出家後も幕政に参与した。なお出家後、諸国を遍歴して民情を視察したという話（『増鏡』や『太平記』に記されている）が伝わっているが確証はない。

■ 高濱虚子三代句碑

月若橋近くの月若公園にある高濱虚子三代句碑（写真-18）。昭和54（1979）年に建立。以前は木陰になって見にくかったのですが、山手幹線芦屋川隧道（写真-19）工事に関連して、芦屋市の手で石碑の向きが変えられて見やすくなりました。

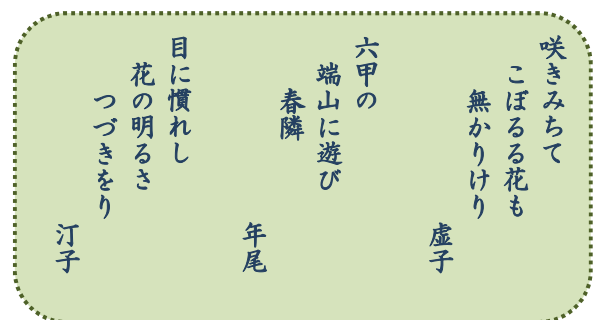
また、この近くには、俳誌『ホトトギス』の主宰者である稲畑汀子さん（虚子の長男である高濱年尾の次女）の住居に隣接して「虚子記念文学館」が平成12（2000）年4月にオープンしています。



写真-18 高濱虚子三代句碑



写真-19 山手幹線・芦屋川隧道



■ モノローグ

歴史を語り伝える方法はいろいろあると思いますが、橋の名もそのひとつですね。芦屋川には、歴史のロマンを感じさせる橋が4つもありました。由来を調べてみて、風雅たよう「いにしへの芦屋」の一端を垣間見ることができました。

なお、芦屋川下流部左岸側にある芦屋公園に建立された「阪神淡路大震災 慰霊と復興のモニュメント」(写真-20)にも稲畑汀子さんの句が刻まれています(写真-21)。



写真-20 「阪神淡路大震災 慰霊と復興のモニュメント」

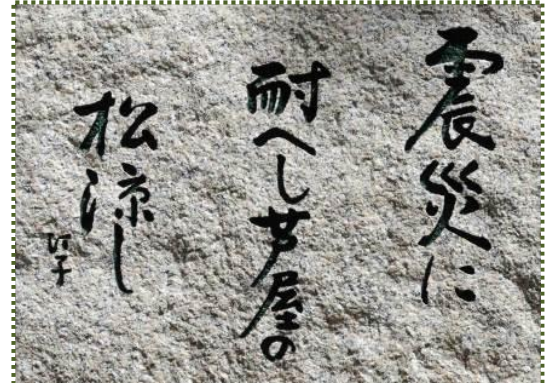


写真-21 稲畑汀子さんの句

ハナビシソウ（花菱草）

ケシ科ハナビシソウ属の耐寒性一年草で、別名、カリフォルニアポピー。明治時代に渡来し、家紋の花菱に似ているために、この名がある。草丈 60cm くらいで、茎は根元からよく出て株立ちになり、葉は掌状に3裂する。4月から5月にかけて、花径 3~10cm くらいの4弁花を開く。花色は、濃い黄色が基本だが、淡黄色・オレンジ色・朱色・サーモンピンクなどのものもあり、八重咲きもある。花壇や切り花用に用いられている。同属の植物にヒメハナビシソウがあり、草丈 30cm くらい、花も 4cm くらいと小柄で、鉢植えやプランター植えに栽培されている。



写真-22 ハナビシソウ（葉平橋上のプランターに咲いていた）

【参考資料】

- 1 『精道村のあゆみ〜郊外住宅地・芦屋の幕開け』 芦屋市教育委員会社会教育部学習課編 令和2年3月
- 2 『平家物語』 作者諸説あり
- 3 『伊勢物語』 作者、成立年 ともに不詳
- 4 『新阪神史話』 東 薫 昭和55年5月
- 5 『猪早太供養碑（野村町）』 西脇市 HP 令和3年3月更新
<https://www.city.nishiwaki.lg.jp/kakukanogoonnai/shichoukoushitsu/hisyokouhouka/furusato/1359453207946.html>
- 6 『芦屋川の歴史』 芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課編 平成25年3月
- 7 『芦屋思い出写真館』 芦屋市 HP 平成29年3月更新
<https://www.city.ashiya.lg.jp/camera-eye/omoide-index.html>
- 8 『雲林院、在原業平、藤原高子、藤原公光、平城天皇、北条時頼、ハナビシソウ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成23（2011）年10月 『ひょうご水百景』No.5

改訂：令和8（2026）年4月 『ひょうご水百景』No.5